

半田病院の現状

現在の半田病院は、現在地へ新築移転してから約35年が経過し、①配管設備等を中心とした施設の老朽化、②最新医療機器の導入スペース不足、③外来棟や手術室、検査科、放射線科などの病院の中枢的な機能がある中央診療棟の耐震性不足等の課題を抱えています。

工事を実施するには、長期間にわたる診療の制限や中止が必要となり、患者さんの命にも関わってきます。

建設後40年が経過する平成34年を越えて病院建設が遅れた場合には、医療ガス、ナースコール、電気設備、給排水配管などの大規模改修に多額の費用が必要となります。

経営への影響

現病院での多額の改修費や病院収入の減少による赤字は最終的には市民サービスや新病院の運営に影響を及ぼすこととなります。

現に、経営難などにより、この10年間に約200もの公立病院が姿を消しています。

早期整備の必要性

新病院建設が遅れた場合の最大のリスクが、大地震による被災です。半田病院と同時期に建設された熊本市民病院は、昨年4月の熊本地震による建物や配水管などの損傷により診療の継続が困難となり、入院患者全



▲半田病院長 石田義博

員が院外に避難しました。その後、病院閉鎖の議論もある中、国の支援により早期に新病院を建設することとなりましたが、現在は多額の人員費を負担しつつ、職員を他の病院に派遣しています。南海トラフ巨大地震では、多くの重要施設が被災するため、国の支援で半田病院を優先して再建することは不可能であり、半田病院が消滅する危険性もあります。そうならないためにも、新病院の早期整備が必要です。

病院の消滅もたらす事態

もし、半田病院がなくなれば、半田市民の方も、心筋梗塞や脳卒中といった一分一秒を争う病気でも遠くの病院を受診することとなり、日常でも多くの市民の命が失われることとなります。新病院の早期建設により、最新の医療機器の整備等が行われることで、よりよい医療を早期に提供することが可能となり、平時においても多くの

市民の命が失われずに済みます。

また、大地震時にも免震構造により病院機能が維持できるため、被災直後から患者さんを受け入れることができます。

市民の命を守るために

極めて高い発生確率の南海トラフ巨大地震が迫る中で、赤レンガ東土地の検討などで当初の予定より新病院建設が遅延している今、最悪の結果を招く危険性を少しでも減らすために、一刻も早く新病院を建設する必要があります。



▲半田病院

「コミュニティバスについて

市の新たな公共交通体系の構築に向けた協議を進めています。新たな公共交通体系は、「地域の一体性の確保」、「中心拠点間（知多半田駅⇄JR半田駅⇄市役所・半田病院）の移動のしやすさ」、「市内の観光施設をつなぐ」、「市外主要駅との連携」を重点に創っていきます。

そして、平成30年10月からは、基幹路線バスと地域循環バスの実証運行が始まります。

基幹路線バスは、市内の人口密集地域と主要な公共施設、鉄道駅などをつなぐ路線です。地域循環バスは、現行の路線バスの見直しに合わせ、その地域を循環する路線になります。

なお、この路線から離れた地域については、地域のみなさんが主役となり、話し合い、創り、守り、育てていただく地区路線バスになります。地区路線バスの運行には、話し合いや協議していただく場となります（仮称）市民協議会を設置していただく必要があります。



▲バスを利用する小学生